



Alexandrite



ふー

七千子……

今日も
いい天気だな

冬のこの
寒さの中で

採れる野菜は
甘くて美味しい

わかる

俺今日
鍋食べたいなあ

おお

そいつは
名案だな!



光坊に
頼んでみるか

おう!



見たところ
急に出陣になった
って感じだな

それに



どうやら
少しばかり
厄介な敵のようだ



んん?

なんだ?
騒がしいな



ああ、
急なことではな。
行かねばならん

帰りは…



ほら、
取れたぞ

あのさ、
三日月

三日月さーん!!

……

ん、

ああ、
今行くぞ

隣に
いるだけでも
いいから
朝まで
君と過
ごしたいと

我儘なのは
わかってるが

今日の
夜は……

話の途中で
すまん

いやなに

大したこと
じゃない

気をつけてな

怪我するなよ?

今言うべき
じゃないって
ことだよなあ

あい分かった

——じゃ、俺は
この野菜担いで
厨房に行くとするか

……鶴や

じゃりっ





あのさ

さつき

三日月——

鶴

今夜

「今夜君と
過ごしたいこと
言いかけた俺は

そんなにも
分かりやすい顔を
していたのだからか

帰ったらすぐに
お前のもとへ行く

三日月は



表情筋…
気の緩み…

たまに俺の
心を読んでくる

何してんだ？

顔の体操

ずっと昔から
近くにいる

泣いて

怒って

笑って

拗ねて

寂しがる

色んな俺を
見てきたから
分かってしまっ
とでもいうのだからか

俺はといえば



記憶にあるのは
三日月が美しく
微笑んでいる姿
ばかりで

ああ、でも

光坊
今日は鍋が
食べたいぞ

じゃあ
何鍋に
しようかな



そういえば
一度だけ

酷く怒っている
三日月を見た
ことがあったような

いまだに
その内側があまり
読めないことが
ほんの少し
ばかり悔しい

その
理由は



果たして
何だったか

まっこれだけ
長生きしてりや

忘れちまう
こともあるか



昔話の
ひとつふたつ

じゃ、
頼んだぜ？

はっはっ



『今夜』……

はあ〜

はあ〜

そわ……

無事で
帰ってきてくれよ



三日月宗近









ホー
ホー

カタツ

鶴

おお
遅かったな

帰ったぞ

ア
ー

すまんな、
すっかり遅く
なってしまった

もう寝て
いるかと
思ったが

まったく、
もう子どもじゃ
ないんだぞ？

よっど

ははは
そうだったな

怪我は？

ないぞ

そうか

おかえり

よかった

ただいま

んん



疲れて
いないか？

戦場の
匂いだ



すごい
じゃないか！

血の匂い：
敵のもの
ようだが

主から
誉を貰ったぞ

土と草の
匂いが
するな

それと



…やっぱり
今日は
ゆっくり
休ん

んん



なんだ？

三日月…？

今日は
随分と

んっ

カキヤヨ

み

ちやる

はっ

ん

ん



はあっ

血を見て
昂るとは

きゅっ



なるほど...

は...



いや
驚いたぜ
三日月

んっ

君のような
穏やかな者も



……
面目ないな
すまん

ははっ
なんで
謝るんだよ



この色の
瞳を見るのは
久しぶりだな

それが
少し

嬉しい。
などと考えながら



俺の方こそ
すぐに
気付けなくて
悪かった

他の者はきつと
こんな三日月を
見たことはないだろうと

君はいつも目を
細めているから
分かりにくいが

紅い...





傍に
居なければ

優しい瞳は
若草のような色に
輝いて見えた

お前を
守ることも
できんだ

俺のために
怒ってくれていた

幼い俺が
君にちやんと
頼れるように

強く揺るがぬ
大きな存在として
いつも笑っていた

守るために

そんな
君が
今……

俺の前で
こんな表情をして

どうしようもない

熱を

はあ

受け止めて
欲しいと
手を伸ばしている

頼りに
してくれている

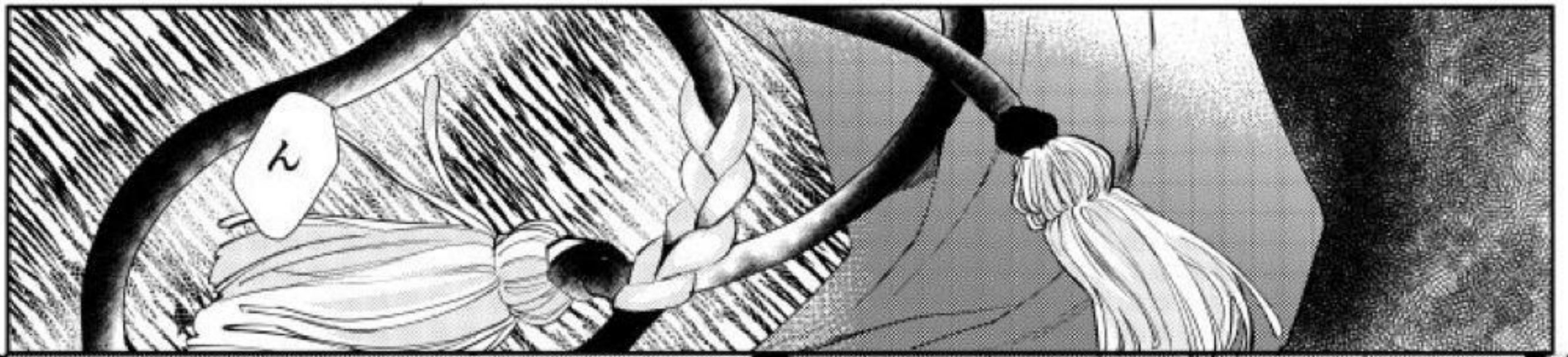
鶴…

三日月

カタ…

おいで

カタ…





今日は
俺に任せて

はぁ

君は
見ていればいい



なにを...

オレが
下ニカガ...

そんな
わけない
だろ...

なあに
悪いようには
しないさ



な...

あ

ぐちゃ

だろ



く...っ
あ







ぎゅん

ふあっ

っん

あ

良いか？

ずん

あ

ん

んん

熱いな



ああ、
すごく……っ
じゅん

ん

うん

飢えた獣の
ようにキラキラと
怪しく光る瞳は

好きな
だけっ

出して
いいから

君の熱……
全部俺、にっ
くれよ

あ

ああ

俺を見つめて



いつも優しく俺を抱きながら

はあっ

すぢゅっ

ふ



甘い言葉をこぼす君の口からは

ぎゃ

あゝ

すぢゅっ

はあ

はあ

はあ



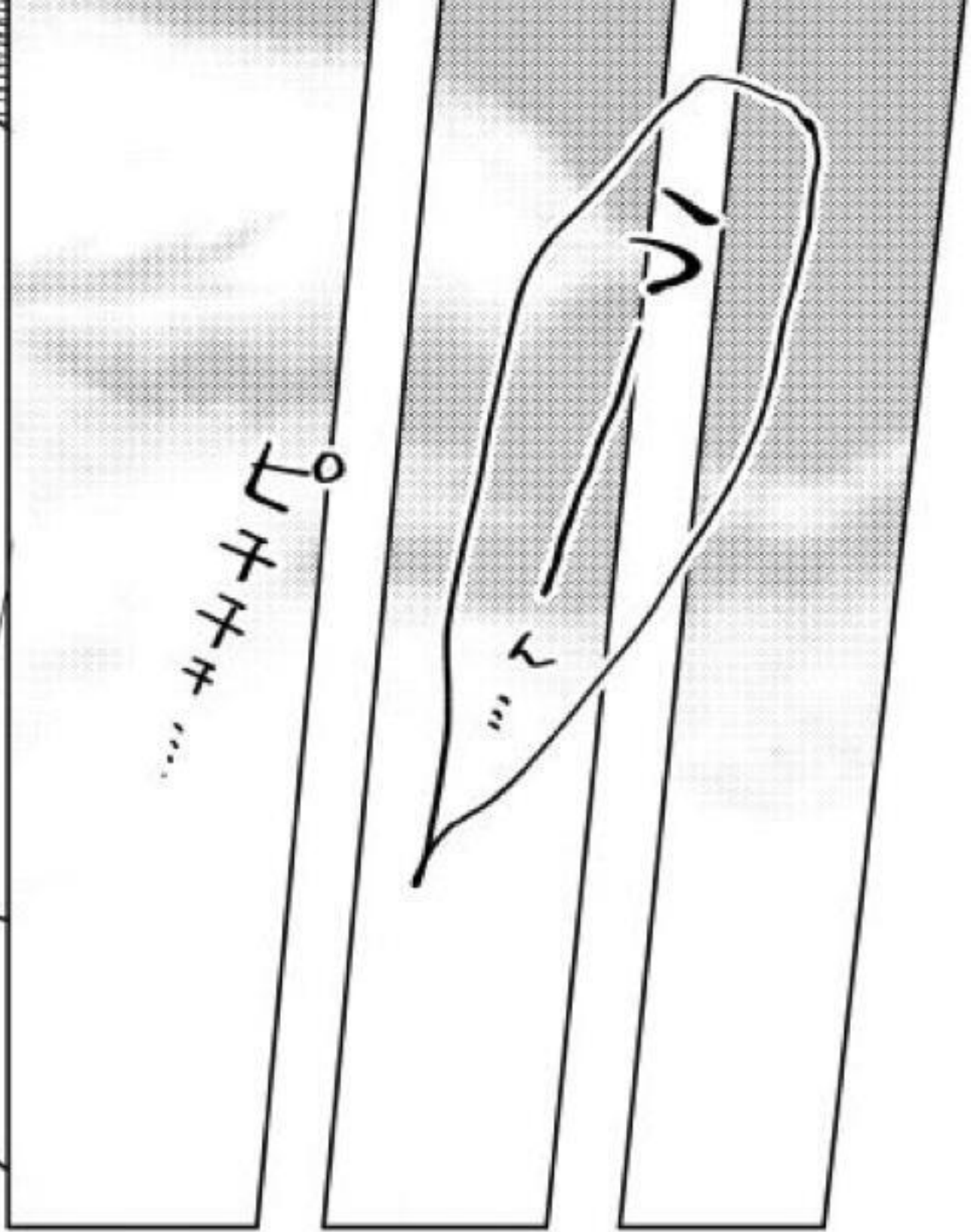
ただ
荒い呼吸だけが響いた

あゝ

はっ...

あ、あっ
溢れ...

あ







面白い例えだな

いや、
例えじゃなく
本当に…

しかし…



そのようなことを
言ってきたのは

鶴が
はじめてだぞ？

…え？

昔から…か
俺自身も
気づかなかった
ことだが…

考えられることが
あるとすれば
恐らく…

はは、

そうか
そうか



どういう
ことだ？

当たり前の
ことだと
思っていたから

訊いたことすら
なかった

きつと
溢れ出て
いるの
だろうな

俺は周囲よりも
感情を表に出すのが
得意ではないからなあ

それに

どれだけ
言葉を並べても

どれだけ
注ぎ込んでも
きつと足りない

？

まあつまり…
よく言うだろう、



目は
心の窓だと。

口より
多くを語る
こともある

鶴丸は
俺自身よりも
俺の心を
知っている
かもしれんな

……！



ま、待ってくれ
三日月
じゃあ、
あの色も
この色も

えええ
？

コウ

全部
俺にしか……

ほう、

人生には
驚きが溢れている



俺の瞳は
そんなにも
鮮やかなのか

三日月の言うことが
正しいのなら

是非
見てみたいものだ

して鶴よ、



すごく好きな色だ

君の心
そのもの

でもなんで
俺にだけ…

…わからない

だが
透き通るように
綺麗で

俺がずっと
見ていたものは

やわらかい
日差しのような

それは

きっと
どれでもない
この色は

今 俺の瞳は
何色に光っている？

紅にも

藍にも

黄にも

緑にも
見えるが



はは、

ちゅっ

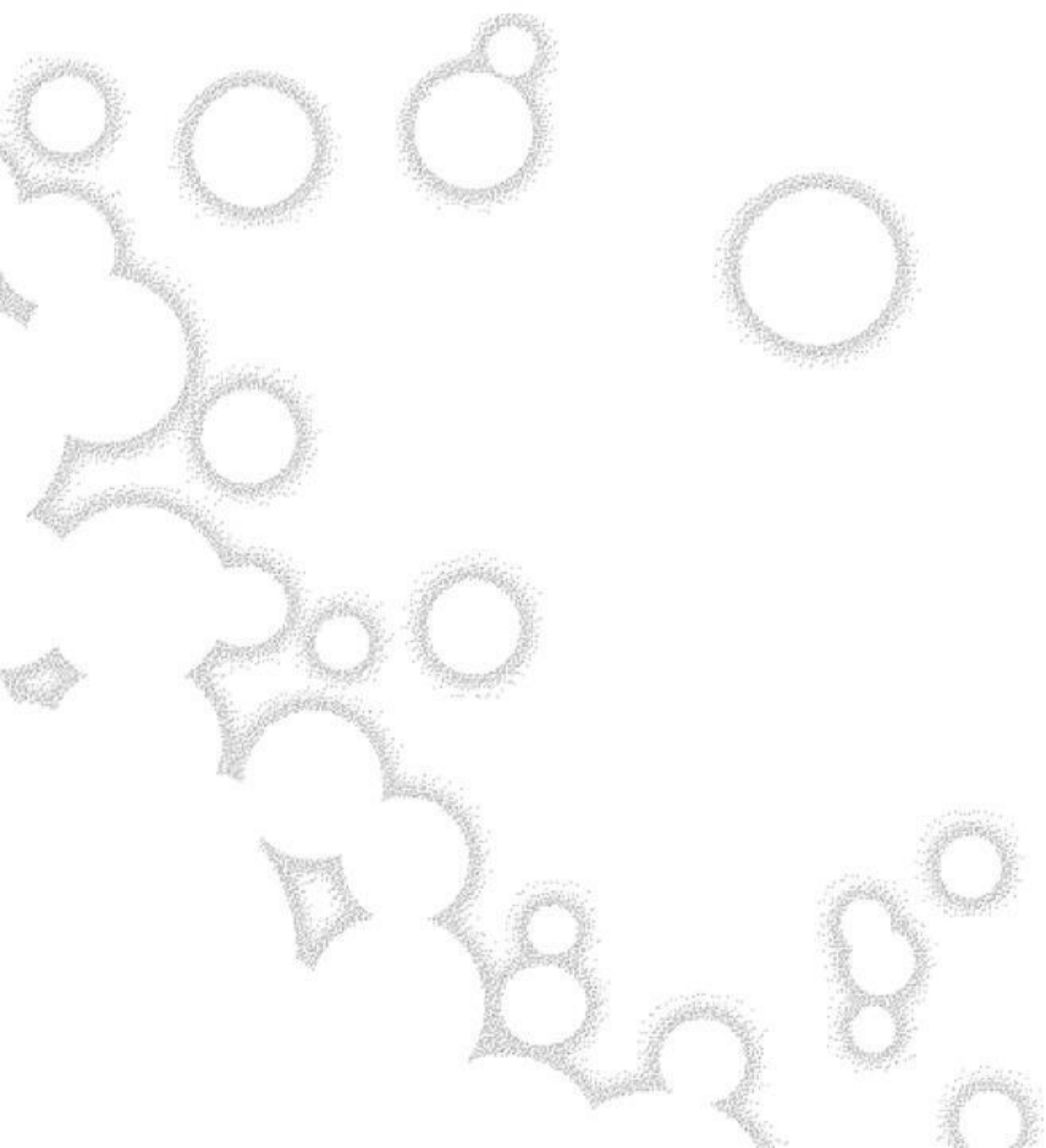
当然だろうな



宝石が
最も鮮やかに
輝き

色を放つのは

光が傍に
あるときだろうか？



Alexandrite

はじめまして、凌と申します。
この度はこの本を手にとって頂きありがとうございました!
一年前くらいから「騎乗位本を出す」と謎の宣言をしていたので
ようやく出すことができてよかったです!
過去最高に締め切りギリギリでした(毎回言ってる)

タイトルの「アレクサンドライト」という石の言葉は「秘めた思い」らしいです。
三日月は鶴丸よりもはるかに感情を表に出さない存在なんじゃないか…と思いつつ、
それでも収まりきらなくなった気持ちをどう外側に出すんだろうかと考えたときに
浮かんだのが「目は口ほどに物をいう」「目は心の窓」って言葉でした。
少しでも楽しんでいただけたら幸いです!

2017.1.8/P*M 如月凌
Twitter:@m_om_oi
Pixiv:418565
E-Mail:ryooo0203@gmail.com

印刷:金沢印刷様
※ネットオークションへの出品、無断複写・転載禁止